関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

「魔女」に対する拷問と処刑

その他のタイトル	Folter und Todesstrafe bei ?Hexen“
著者	溝井 裕一
雑誌名	独逸文学
巻	49
ページ	269-283
発行年	2005-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018061

関西大学『独逸文学』第49号 2005年3月

「魔女」に対する拷問と処刑

Folter und Todesstrafe bei „Hexen“

溝 井 裕 一

0．はじめに

グリム・メルヒェンに登場する悪い魔女たちは、決まって悲惨な最期を遂げています。例えば『白雪姫』(KHM53) の最後では悪い継母に焼けた鉄の靴がはかされ[1]、『ヘンゼルとグレーテル』(KHM15) では魔女は火刑になり[2]、『兄と妹』(KHM11) では、魔女は窯のなかに突き落とされています[3]。

このような物語には、現実の魔女狩りにおいておこなわれていた拷問や処刑などが影響を与えています。現実の魔女狩りでも、魔女に仕立てあげられた人たちは恐ろしい拷問にさらされ、そして火あぶりなどの刑に処されていました。

今回のシンポジウムでは、私のテーマはそうした中世から近代にかけての拷問と処刑をとりあげました。

第1章では、魔女狩りでおこなわれた拷問や処刑の様子を紹介しますが、第2章では、もっぱら魔女に対しておこなわれた火あぶりの刑が、当時の人びとにとってどのような意味を持っていたのかについて紹介していこうと思います。

---

1 Vgl. Grimm, Jacob / Grimm, Wilhelm: *Kinder und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm*, Band1. Stuttgart: Philipp Reclam jun., 1980, S. 269ff.

2 Vgl. Grimm, Jacob / Grimm, Wilhelm 1980 (Band1), S. 100ff.

3 Vgl. Grimm, Jacob / Grimm, Wilhelm 1980 (Band1), S. 79ff.

1．中世～近代初期の拷問と処刑

1.1．魔女狩りと拷問

この章では、魔女狩りのときに主におこなわれていた拷問のやり方を描いた絵や、拷問用の道具を紹介します。

拷問は、被疑者に耐えがたい苦痛を与えて強制的に自白を引き出したり、捏造したりするためにおこなわれる野蛮な手段です。ヨーロッパにおいて拷問は、古代ギリシアのアテネや、ローマなどでおこなわれていたらしく、はじめは奴隷に適用されていたのが、ローマ共和国の時代になると市民に対してもおこなわれるようになりました[4]。

その後ヨーロッパに流入したキリスト教の教会は、最初のうち拷問を容認していませんでした。例えば教皇ニコラウス1世（在位858-867）は、拷問は世俗の法律でも神の法律でも許可されてはならないと述べています[5]。しかし時代が下って11世紀になると、拷問が裁判で使われるようになりました。ヨーロッパの拷問が最高潮に達したのは、異端者狩りや魔女狩りがおこなわれていたときです[6]。

図1には、引き伸ばしによる拷問とあります。これは図で描写されているように、被告人の両手両足を縄で縛り、両側から引いて苦しめるものです。そして図2には「振り子」の拷問があります。これは魔女裁判でよく使われたもので、被告人の手などを縄で縛って釣り上げるのですが、落下させて床にぶつかる直前に止めるようなこともおこなわれました。こうされると、腕の関節が外れて大変な苦痛を覚えることになります。

また図3や図4は、足や指を挟みこんで、ねじで締め上げる恐ろしい道具です。これらも異端審問や魔女裁判で使用されていました。このような道具は単に受刑者を痛めつけて自白を引き出すだけでなく、それを見た者の恐怖を引き起こすようにも設計されたのです。

---

4 Vgl. Brockhaus: *Brockhaus-Enzyklopädie in 24 Bänden*, Band7. Leipzig-Mannheim: F.A. Brockhaus, 1996, S. 458.

5 Vgl. *Lexikon des Mittelalters*, Band4, Stuttgart: J.B. Metzler, 1999, S. 615.

6 Vgl. Brockhaus 1996 (Band7), S. 458.

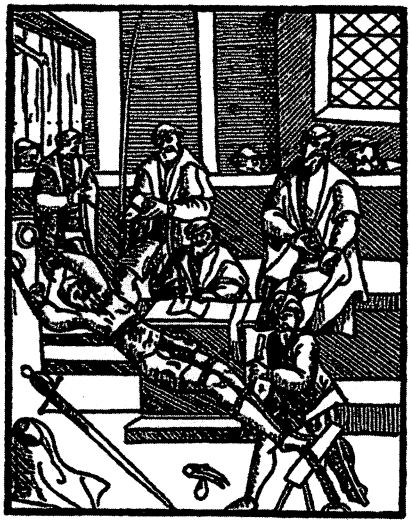

図1：引き伸ばしによる拷問（16世紀の木版画）

図2：「振り子」の拷問

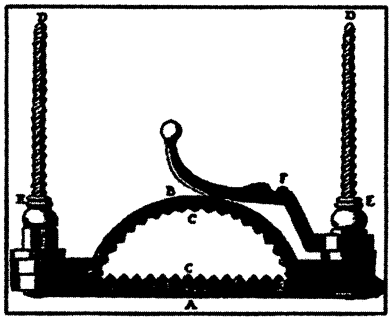

図3：スペインの長靴

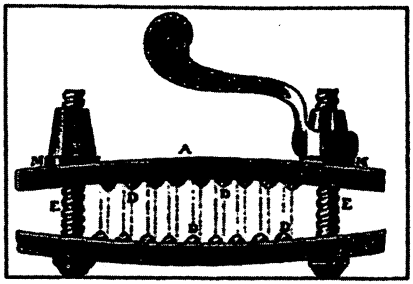

図4：親指ねじ

拷問の最初の段階では、尋問者が被告にこうした道具を見せて、その使い方を解説しました。痛みに対する被告の恐怖をあおって、自白を引き出すためです。

また『白雪姫』で継母がはかされる赤く熱した靴も、拷問方法のひとつであったようです。熱した靴は、1590年ごろにイングランドの魔女裁判で実際に使用されたことが報告されています[7]。

7　森島恒雄：『魔女狩り』、岩波新書、1986年、107ページ以下参照。

1.2. 中世～近代の処刑と、魔女の火刑

中世～近代にかけておこなわれた拷問というのは、このように大変残虐なものが多かったのですが、処刑方法もまた、恐ろしいものが多くありました。

図5は、斬首の刑と、車輪の刑の様子を描いたものです。斬首の刑は、首を切られるだけで苦痛が少ないと考えられていたので、これを受けるのは貴族の特権でもあったようです。しかしその背後に描かれている車輪の刑は、生きたままの火あぶりに劣らない、恐ろしい処刑方法でした。この刑を受ける者は、最初に大きな車輪を叩きつけられて手足を潰されます。それがすむと、図のように車輪に載せて高く掲げられ、生きながらにして鳥などに肉をついばまれます。受刑者に食べ物を与えて、長い間苦しむように無理やり生きながらえさせたこともあったそうです。

しかし魔女の処刑方法といえば、誰でも思い浮かべるのはやはり火あぶりの刑です。図6は、当時のパンフレットに掲載された魔女の火あぶりの絵ですが、ここでは魔女は、竜の姿をした悪魔とともに描かれています。火あぶりの対象となったのは、魔女のほかに、姦通や近親相姦な

図5：斬首の刑（1508年、木版画）。背後には、車輪の刑に処されている男の姿が見える

図6：魔女が火あぶりにされている様子

どの性犯罪を起こした者や（当時は、同性愛も犯罪とされていました）、異端者、そしてユダヤ人などでした[8]。

このように、中世社会は犯罪の種類によって、適応される処刑方法もさまざまでありましたが、斬首の刑が許された貴族とは違って、庶民の受刑者はむごい殺され方をするのが常であったようです[9]。

2．魔女の火刑～その理由とは

2.1．火刑の歴史

拷問や処刑の紹介はここまでにして、第2章では、火刑の意味そのものについて探っていこうと思います。

メルヒェンの世界でも現実の世界でも、多くの場合魔女は火あぶりになりました。しかし、そもそもなぜ、魔女は火あぶりでないといけなかったのでしょうか。その理由はいろいろあげられると思いますが、一番よく挙げられるのは、異端審問と魔女狩りの歴史的な連続性です。

8　川端博監修：『拷問の歴史、ヨーロッパ中世犯罪博物館』、河出書房新社、1997年、56ページ参照。

9　川端博監修　1997年、36ページ参照。

異端者とは、中世に権力を握っていたカトリックの教義とは違う、自分たち自身による信仰を築こうとした人びとのことです。彼らはキリストの使徒たちの生活を理想とし、贖罪や魂の浄化を呼びかけました[10]。また彼らは封建制度や男女の性的な交わりを否定し、貧しいことの徳を訴えてもいました[11]。

こうした人びとは、12世紀初期ごろから増えはじめ、有名なグループにカタリ派やヴァルド派などがあげられます。彼らの勃興に恐れをなした教会は、彼らを異端者と決めつけて、排除しにかかりました。史学者は、13世紀のあいだに異端者が悪魔崇拝と結びつけられるようになったのではないかと指摘していますが[12]、同じ13世紀に、異端とされた人びとの処刑方法は火刑が一般的になっています[13]。このことは、悪魔崇拝と火あぶりが、切っても切り離せない関係にあったらしいことをうかがわせます。後に、悪魔崇拝はユダヤ人にも当てはめられ、多くのユダヤ人は火刑で命を落としました。ちなみに魔女狩りで悪名高い拷問は、この異端者狩りの期間に認められています[14]。

異端者狩りがほとんど終わろうかというころに開始したのが魔女狩りでしたが、この二つの出来事には、直接的なつながりがあります。異端審問を魔女狩りに結びつけた人物として悪名高いのは、教皇ヨハネス22世（在位1316-1334）です。彼は王の選挙の認可やイタリアにおける神聖ローマ帝国の権力をめぐって、皇帝ルートヴィヒ4世（在位1314-1347）と争ったことで有名ですが[15]、魔女裁判でも重要な役割を果たしました。彼は1318年2月の教書のなかで、魔女裁判を開始するようにと

---

10 Vgl. Brockhaus 1996 (Band11), S. 692.

11 Vgl. Borst, Arno: *Lebensformen im Mittelalter*, Hamburg: Nikol Verlagsgesellschaft mbH & Co. KG, 2004, S. 619.

12 Vgl. Tuczay, Christa: *Magie und Magier im Mittelalter*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG, 2003, S. 101.

13 森島恒雄　1986年、21ページ参照。

14 Vgl. Behringer, Wolfgang: *HEXEN: Glaube, Verfolgung, Vermarktung*. München: Verlag C.H.Beck oHG, 2002, S. 36.

15 Vgl. Brockhaus 1996 (Band11), S. 209.

書いており、やがて1320年には異端審問官に、魔女を異端者として処分することを命じています[16]。魔女が異端者と同じ処分を受けるということは、つまり火あぶりにしてもよいということを意味します。こうした表面上のつながりを確認すれば、魔女の火刑は異端審問から受け継いだ処刑方法としてみることができます。

2．2．火刑の解釈

しかしこれだけではまだ火刑のもつ意味を知ることはできません。なぜなら魔女にせよ異端者にせよ、あるいはユダヤ人にせよ、なぜ殺され方が火あぶりでないといけないのか、その根本的な理由がわからないからです。表面的には、火あぶりの目的は他の拷問や処刑のように、受刑者をひどく苦しめることのように見えます。あるいは、当時の権力者に反抗した者への、恐ろしい見せしめとしておこなわれていたようにも見えます。

しかし実際は、一般に考えられているように、魔女とされた人びと全員が生きたまま火あぶりになったわけではありません。むしろそれは珍しいことでした。多くの被告人は生きながらにして焼かれたのではなく、まず最初に首を絞めるなどして殺された上で、その体を焼かれています。

ということは、火あぶりの本当の目的は、受刑者を苦しめることにあったのではなくて、魔女の体を焼くことにあったのだ、と解釈することが可能になります。魔女狩りが盛んであった時代の人びとは、魔女の体を焼いて、あとには骨も何も残らないようにすることが大切だと、考えていたようです。

それでは、どうして死んでしまった魔女の体を、わざわざ焼いたりする必要があったのでしょうか。実は、この死体を焼くという行為は、魔女狩りで重要な役割を果たしたキリスト教とは少し違う背景から生まれてきたものであり、骨から死者が復活するという、古代の死生観とかかわっているものなのです。

16　森島恒雄　1986年、50ページ以下参照。

2.2.1. 骨からの復活～メルヒェンや神話のなかで

ひとが一度死んでも、骨さえあとに残っていればまた復活することができる。そうした考え方は、メルヒェンなどのなかに見ることができます。

例えば、グリム・メルヒェンKHM47番の、『びゃくしんの木』がそうです。この話では、男の子が意地悪な継母に殺されてしまいますが、彼の骨がやがてびゃくしんの木の下に埋められると、やがてそこから、美しい鳥が現われます。その鳥は、自分を殺したまま母に復讐し、また男の子の姿となってハッピーエンドを迎えます[17]。

またKHM81の『陽気な兄弟』でも、骨から死んだ人間が復活する話が描かれています。この話に登場するのは聖ペテロですが、彼は死んだ王女の体を切り刻み、それを大釜のなかで煮て骨だけにし、それをまた順番どおりにならべると、呪文を唱えます。すると、死んだはずの王女はまたもとの姿となって蘇ります[18]。

『びゃくしんの木』や『陽気な兄弟』にある、こうした復活の物語は、一見するとただのファンタジーかもしれませんが、意外と私たちの祖先の世界観とつながっているのです。ドイツの民俗学者であるルッツ・レーリッヒは、これらメルヒェンの復活の話は、「宗教心理学的には、まったく前キリスト教的に発想されたもの」[19]、つまり、キリスト教がヨーロッパに入ってくる以前から存在していた世界観のあらわれであると語っています。

またこうした復活の話は、メルヒェンだけに限られたものではありません。ギリシア神話のなかでは、メディアという魔法を使う女性が、八つ裂きにされた羊を復活させます[20]。

---

17 Vgl. Grimm, Jacob / Grimm, Wilhelm 1980 (Band1), S. 239ff.

18 Vgl. Grimm, Jacob / Grimm, Wilhelm 1980 (Band1), S. 392ff.

19 Röhrich, Lutz: *Märchen und Wirklichleit*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GmbH, 1979, S. 68.

20 Vgl. Apollodorus: The library of Greek mythology. Oxford (New York): Oxford University Press, 1997, S. 57.

2.2.2. ケルト人・ゲルマン人の、死と復活の概念

メルヒェンや神話などで見られる骨からの復活は、もともと狩猟民族の間で広く見られる考え方です。多くの狩猟民族には、殺した動物の骨を焼いたりばら撒いたりしてはいけないという決まりが見られます。狩猟民族は、保管した動物の骨を土に埋めれば、再びその動物は蘇ることができるという独特の考え方を持っています[21]。そして、これと同じことは人間にもあてはまります。

人類の歴史は、はじめは狩猟文化からスタートしました。我々日本人も昔は主に狩猟をおこないながら生活していましたし、古代ヨーロッパのケルト人やゲルマン人もまたそうでした。そのために、骨から生き物がまた復活できるという狩猟民族の考え方は、ケルト人やゲルマン人にも残っていました。

例えばゲルマン神話では、ゲルマンの神トールがいったん山羊を殺し、それを食べて骨にします。しかし彼がその骨を残っていた毛皮の上に置くと、山羊は見事に復活します[22]。

またガリア地方に住んでいたケルト人は、一度死にはしても、何度でも蘇ることができると信じていました。このため、ケルト人は戦うときに死を恐れなかったと、ローマ人のカエサルは書き残しています[23]。古代ゲルマン人もほぼ同様に、死んだ人の魂は一度地下に下り、そこで復活のときを待つと信じていたようです[24 25]。

ケルト人やゲルマン人にとって大切なのは死後の復活であり、死というものは、連続する生の一時的な区切りにすぎませんでした。天国にお

---

21 Vgl. Röhrich, Lutz 1979, S. 69.

22 Vgl. Röhrich, Lutz 1979, S. 68.

23 Vgl. Demandt, Alexander: *Die Kelten*. München: Verlag C.H.Beck oHG, 2002, S. 38.

24 Vgl. Vries, Jan De: *Keltische Religion*. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag, 1961, S. 249f.

25 ケルト人やゲルマン人の死生観は、よく「魂の移動」(Seelenwanderung) と表現される。だが後の時代の伝説（後述）においても、死後の復活に骨が重要視されていることから、彼らは魂と肉体とをそれほど分裂させて考えていなかったのではないかと推測される。

ける永遠の生活という思想は、キリスト教がヨーロッパに流入してから確立されたものです。しかしこの世での復活という考え方は、ケルト人やゲルマン人の信仰が消滅したあとも生き残っていたようです。

すこし話がそれますが、ケルト人やゲルマン人の文化は、魔女の火刑と意外に接点があるのかもしれない、と私は考えています。

アニミズム的な発想では、火は時として神そのものであるといい、火に対する信仰はケルト人、ゲルマン人、スラブ人などの間で広く見られました[26]。ケルト人は雷神タラニスに人や動物を燃やして捧げるという風習を持っていたと、ローマの詩人ルカヌスは書き残していますが[27]、この風習が極端になると、図7のような、「ウィッカーマン」という人形

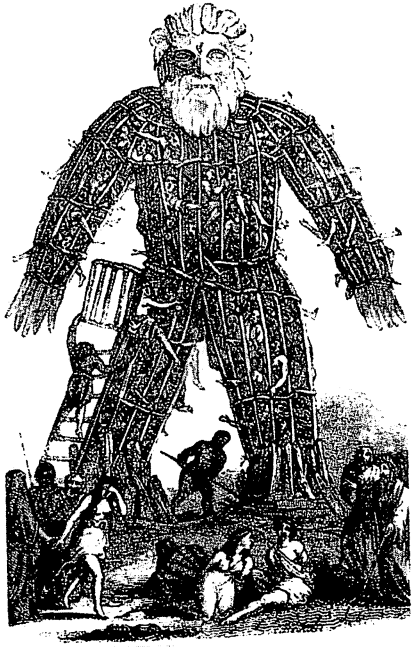

図7：「ウィッカーマン」。古代ケルト人の人身御供の一方法として伝えられる

26 Vgl. Brockhaus 1996 (Band7), S. 256.

27 Vgl. Vries, Jan De 1961, S. 63.

に人を詰め込んで燃やすという、恐ろしい儀式にもなったといいます[28]。そうでない場合でも、ケルト人は人にくいを打ったり、十字架に縛りつけて燃やすことで生け贄をささげていたようであり[29]、その様子は魔女の火あぶりを連想させます。

魔女裁判のときに、古代のケルト人の風習が復活した例のなかには、水審判というものがあります（図8参照）。これは被告人が水に投げ込んで、浮かべば有罪、沈めば無罪という審査方法でした。これは異教的行為であるために、一時キリスト教に禁止されていましたが、魔女狩りのときに復活しました。

図8：水審判の様子

28 ただしこの「ウィッカーマン」という恐ろしい人形は、ケルト人の人身御供の儀式を古代ローマ人たちが誇張して描いたものであるという可能性もあり、そのまま信じるには注意が必要である。

29 Vgl. Demandt, Alexander 2002, S. 46.

そして図9には「魔女の窯」と呼ばれる、魔女処刑用の窯が描かれていますが、これは昔ゲルマン人が、妖怪女と呼ばれた者たちを焼き殺すのに使っていた方法でした[30]。このように、魔女狩りのときには、かつてのケルト人やゲルマン人の風習が復活することがありました。

上山安敏氏は『魔女とキリスト教』のなかで、「(魔女の) 処刑は、古代人の人身御供が近代化されたもので、集団のスケープゴートという意味合いが強かった… [中略] …処刑は民族の聖なる儀式を復活した」と述べていますが[31]、この指摘は決して無視できないと私は考えています。

2.2.3. 魔女の復活を防ぐ意味での、火刑

それでは、骨からの復活にまた話を戻しましょう。興味深いことに、メルヒェンや神話で見受けられるこの考え方は、南チロル地方の伝説にも見られます。その伝説によれば、ある下女 (ここでは、魔女という扱いになっていますが) が他の魔女に殺されて食べられてしまいますが、

図9:「魔女の窯」

30 上山安敏:『魔女とキリスト教』、講談社学術文庫、2002年、235ページ以下参照。
31 上山安敏 2002年、236ページ以下。

下女は再び骨から蘇って肉体を取り戻します[32]。また近代初期に生きた魔術師ファウストにまつわるマウルブロンの伝説でも、ファウストが四肢を切り刻まれたあと蘇る話があります[33]。

これらの伝説は、メルヒェンや狩猟民族の考え方に驚くほどよく似ており、キリスト教がドイツに入ってからも、骨からの復活がありうると信じられていたことを明かしています。

魔女や異端者とされた人びとが焼かれたのは、むごたらしく殺すことだけが目的なのではありませんでした。人びとは、彼らが骨から蘇ることができると信じていたために、その体を焼いていたのです。しかも焼かれた体に残った骨は、あとですりつぶされていたそうです。残った灰は、風のなかに散らすか、川に捨てるかされました。しかもこの行為は、キリスト教的なものではありません。グリム・メルヒェンや狩猟民族、そして古代のケルト人やゲルマン人がもっていた、骨からの復活という考え方に由来していたのです。

3．おわりに

このように、魔女の火刑という一見恐ろしい刑にも、実は古くからの世界観がかかわっていることがあります。しかしこれを表面的にのみ見れば、中世の人びとは残酷であったとか、そういった結論だけを下して終わりになってしまいます。グリム・メルヒェンでも、表面からのみ解釈した結果、「残酷なグリム童話」などという誤った考え方が生まれてしまいました。ところがグリム・メルヒェンは、本当は古代の思想の宝庫であり、昔の人びとの考え方を解明する手助けともなってくれます。

そうした見方を可能にしたのは、レーリッヒのような、ドイツの民俗学者のおかげなのですが、魔女狩りという歴史上の問題でも、歴史学や社会学の立場から見るだけでなく、民俗学からの視点から眺めれば、また違った、新しい解釈が可能になります。そうすることで、魔女狩りがおこなわれた当時の民衆の心により接近できるのではないでしょうか。

---

32 Vgl. Röhrich, Lutz 1979, S. 71.

33 Vgl. Bächtold-Stäubli, Hanns (Hrsg.): *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*, Band2. Berlin: Walter de Cruyter GmbH & Co. KG, 10785, 2000, S. 1273f.

図版出展一覧

図１：Löblich, Eberhard: *Hexenleben: weise Frauen und Zaubereschen*. Halle (Saale): Mitteldeutscher Verlag GmbH, 2001, S. 38.

図２：川端博　1997年、88ページ。

図３：Löblich, Eberhard, 2001, S. 45.

図４：Löblich, Eberhard, 2001, S. 21.

図５：川端博　1997年、38ページ。

図６：Löblich, Eberhard, 2001, S. 40.

図７：ミランダ・J.グリーン著（大出健訳）：『図説ドルイド』、東京書籍、2000年、119ページ。

図８：川端博　1997年、68ページ。

図９：上山安敏　2002年、236ページ。